

小児科学講座

教授：井田 博幸	先天代謝異常
教授：大橋 十也	先天代謝異常 (DNA 医学研究所に outward)
准教授：宮田 市郎	小児内分泌学
准教授：勝沼 俊雄	小児アレルギー学
准教授：和田 靖之	小児感染免疫学
准教授：加藤 陽子	小児血液腫瘍学 (輸血部に outward)
准教授：浦島 充佳	臨床疫学 (分子疫学研究室に outward)
准教授：小林 博司	先天代謝異常 (DNA 医学研究所に outward)
准教授：齊藤 和恵	小児臨床心理学
講師：藤原 優子	小児循環器病学
講師：斎藤 義弘	小児感染免疫学
講師：田知本 寛	小児アレルギー学
講師：秋山 政晴	小児血液腫瘍学
講師：小林 正久	先天代謝異常, 新生児学
講師：浦島 崇	小児循環器病学
准教授：金子 崇	小児血液腫瘍学 (東京都立小児総合医療センター)
准教授：奥山真紀子	小児精神医学 (国立成育医療研究センター)
准教授：小川 潔	小児循環器病学 (埼玉県立小児医療センター)
准教授：浜野晋一郎	小児神経学 (埼玉県立小児医療センター)
講師：宿谷 明紀	小児腎臓病学 (国立病院機構相模原病院)
講師：清水 正樹	新生児学 (埼玉県立小児医療センター)

教育・研究概要

I. 代謝研究班

代謝研究班はライソゾーム蓄積症ならびに多発奇形、発達遅滞に関して、以下の成果をおさめた。(1) クラッペ病, ムコ多糖症 VII 型モデルマウスで遺伝子治療の有効性を示した。(2) ムコ多糖症 II 型モデルマウスの骨髄移植前処置でインターフェロン誘導薬剤, 抗 ckit 抗体の有用性を示した。(3) ムコ多糖症 II 型モデルマウスで酵素補充療法, 骨髄移植療法, その両方の治療効果を比較検討し両治療法には相加的効果があることを明らかにした。(4) 分子シャペロンを誘導する低分子薬はボンペ病の治療に有効であることを示した。(5) 酵素製剤の経口投与はボンペ病モデルマウスの酵素補充療法における免疫寛容

導入に有効であることを, より臨床に近い実験系で示した。(6) 当院におけるファブリー病患者約 100 名のデータベースを構築した。(7) マイクロアレイ CGH およびエクソーム解析を含めた次世代シーケンシングの技術を多発奇形・発達遅滞症例の診断に応用した。

II. 神経研究班

1. 小児外傷後てんかんの検討

16 歳未満に脳外傷を受傷し後遺症を残し 2 年以上が経過している 142 例を対象として, 原因, 急性期と現在のてんかんの状況について調査し, てんかん群 37 例と非てんかん群 105 例で比較した。その結果, てんかん発症率のリスク因子としては, 虐待, 急性硬膜下血腫, 急性期意識障害の程度が重度で持続が長い, 移動能力がない, 中等度以上の知的障害だった。

2. てんかん重積状態における fosphenytoin (fos-PHT) の有用性の検討

てんかん重積状態における fos-PHT の有用性を, 24 例を対象に 2 歳で 2 群にわけて比較した。有効率は 70% で年齢群の差はなかった。副作用は 1 例の一過性血圧低下のみで, 本剤は 2 歳未満を含めた小児のてんかん重積に対して有効かつ安全に使用できると考えられた。なお PHT 濃度は, 22.5mg/kg 投与後 10~15 時間で有効濃度以下となり, 7.5mg/kg/day の維持量では有効濃度を保てなかった。

III. アレルギー研究班

アレルギー研究班の主な研究対象は, (1) 基礎分野 (マスト細胞, 好酸球, 気道上皮細胞), (2) 喘息, (3) 食物アレルギー, (4) アトピー性皮膚炎, (5) アレルギー治療である。喘息, 食物アレルギー治療に関して我々はここ数年, いくつかの大規模臨床研究を行ってきた。以下に列挙する。①PET study (Preventive effect of tulobuterol patch for the long-term management of infantile asthma study), ②PARG study (Pediatric Asthma Research for Guideline Update: Add-on use of tulobuterol patch on unstable asthma treated with leukotriene receptor antagonist), ③CIT study (A comparison of continuous inhalation treatment with salbutamol and isoproterenol for severe pediatric bronchial asthma: A multicenter, double-blind, randomized study), ④OSCAR study (Optimal stepdown therapy for controlled pediatric asthma responded to SFC), ⑤ORIMA study (Effect of oral immuno-

therapy in preschool children with milk allergy) 等である。この内、①、②については英文誌に受理された。

IV. 血液腫瘍研究班

血液腫瘍研究班では、医学部5年生に大学病院における小児緩和医療をテーマに small group teaching を行った。さらに成人緩和ケアチームと小児科が連携し、小児がん患者に対応した緩和医療を提供する体制を確立した。一方、当科は国立がん研究センター中央病院眼腫瘍科と共同で網膜芽細胞腫における眼球温存治療を行っている。また、治療後の遠隔転移や二次がん発症の早期診断における尿ポリアミン測定の有用性を検討している。

基礎的研究の概要を以下に述べる。腫瘍細胞においてテロメラーゼは、盛んな細胞分裂に伴うテロメア短縮やテロメア損傷を修復する重要な酵素である。テロメラーゼ活性化メカニズムを明らかにすることは、腫瘍細胞の薬剤耐性克服につながる。JASREN-A 細胞を用いて、エリスロポエチン (Epo) によるテロメラーゼ活性化経路には、Epo 受容体-JAK2/STAT5-AKT による hTERT タンパクのリン酸化が重要な役割を果たしていることを明らかにした。

V. 感染免疫研究班

感染免疫研究班では、慈恵医大臨床医学研究所と国立成育医療研究センター研究所成育遺伝研究部で主に研究が行われた。臨床医学研究所では、マルチプレックス PCR (Seegene 社の感染症検査キットおよび島津製作所のマイクロチップ電気泳動装置による感染症微生物検査システム) を使って小児炎症性疾患や呼吸器感染症の病原体検索を行った。成育遺伝研究部遺伝子診断治療研究室では、慢性肉芽腫症 (CGD) における腸内細菌叢の変化と CGD 腸炎の発症機序に関する検討や CGD の肉芽腫性病変に対するサリドマイドの効果を検討した。CGD 腸炎患者の腸内細菌叢を 16S リボゾーム RNA ライブラリーを用いた Terminal-Restriction fragment length polymorphism 法で解析し、Bacteroides, Bifidobacterim などの腸内細菌が著しく減少することを明らかにした。また、これまで CGD の肉芽腫性病変に対して投与されてきたステロイドや抗 TNF α 阻害剤に代わる薬剤として、サリドマイドが易感染性を悪化させずに症状を改善させることを臨床的に証明した。

VI. 循環器研究班

循環器研究班は、2012年度は日本小児循環器学会、Pediatric Academy Society, American Heart Association, Asian Society of Pediatric Research などで研究結果を報告した。基礎研究として PH ラットでのテルミサルタン・利尿と血管拡張作用のある carteritide の効果、bisoprolol の右心不全への評価、臨床研究として先天性心疾患におけるウロコルチンの評価、angiopoetin 動態、腎障害の早期診断、代謝疾患の呼吸循環病態、WPW 症候群の上室頻拍合併の危険因子を検討した。

このうち麻酔科領域で使用する Mallampati 分類を用いてハンター症候群の重症度分類が可能である事を報告し、第8回 ASPR で YIA を受賞した。

基礎研究の肺動脈絞扼による右心不全ラットでの bisoprolol は肥大、線維化、autophagy を介して右心不全が改善することを明らかにし、2013年小児循環器学会会長賞を受賞した。

VII. 腎臓研究班

腎臓研究班では、小児領域での血液浄化療法、学校検尿に於ける血尿の意義、ネフローゼ症候群の長期予後、低出生体重児と小児慢性腎臓病の関連など臨床に役立つテーマをもち研究を進めている。さらに山田は腎臓・高血圧内科横尾先生のもとで「腎不全が骨髄・脂肪由来間葉系幹細胞の分化へ与える影響の評価」という基礎的な研究をし、英分論文を作成し査読待ちの状態である。その他レアなケースの症例報告を全国さらには国際レベルの学会で発表している。若い班員が多く、研究期間も短いが一歩は原著論文となり、その成果は徐々に実を結び始めている。また新たに三輪が加わり、DNA 医学研究所大橋教授指導の下 Fabry 病の腎臓について基礎的な研究を開始予定である。

VIII. 内分泌研究班

内分泌グループはこれまで代謝研究班の中の1グループとして活動してきたが、近年内分泌を希望する若手医師が増えてきたため、研究面での更なる推進や小児内分泌専門医育成の必要性を考慮し、1研究班として独立することになった。内分泌研究班の教育・研究概要は以下の通りである。

(1) 基礎的研究では、外科的に左心負荷ラットを作成し、それらラットの脳内での Urocortin 2, 3, Nesfatin-1 およびその受容体の発現動態を明らかにするとともに、炎症性サイトカインとのクロストークについても検討を行った。現在、免疫組織学的検

討および行動解析も施行中である。(2) 臨床研究では、MCT8 異常症 3 症例において SLC16A2 遺伝子の新規変異を同定し、臨床像との関連性を検討したところ、内分泌学的多様性が認められた。(3) 多施設共同でロタウイルス感染により生じたインスリン分泌不全の臨床的検討を継続して行っている。(4) 超低出生体重で出生して SGA 性低身長症を呈した症例に対して GH 治療効果の検討を行った。その結果、good responder と poor responder とに顕著に分かれることが判明した。(5) 教育面では、埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科および都立小児総合医療センター内分泌代謝科にそれぞれ 1 名ずつレジデントを派遣して、小児内分泌臨床を集中的に勉強する機会を設けている。

〔点検・評価〕

小児科学講座の大きな特色は、小児科のほぼ全ての領域を網羅する専門性を兼ね備えている点である。当講座の研究班は代謝班（先天代謝異常グループおよび奇形症候群グループ）、神経班、アレルギー班、血液腫瘍班、感染免疫班、循環器班、腎臓班、新生児班、精神班、内分泌班の 10 の班で構成されており、日常の診療業務や学生教育に加え、臨床研究や基礎研究も行っている。本年度の評価として、研究面では各研究班とも昨年度と同程度の学会発表や論文発表がみられ、業績においては現状維持であると考えられた。また教育面では、レジデント教育・研修医教育・学生教育に対する積極的な取り組みが進み、教育レベルは着実に上がっていると思われる。

それでは各研究班の点検・評価に目を向けてみたい。まず、代謝研究班は昨年度と同様に国内外での学会発表や英語論文発表を活発に行った。当研究班では若手の活躍が目立ち始め、活性化が進んでいる。科研費も複数獲得し、様々な分野での研究が進行中であり、ますますの躍進が期待される。神経研究班は主に外傷性てんかんの分析やてんかん重積に対する治療薬の有効性などの臨床研究を行っており、最近では基礎研究も進んでいる。本年度も海外での学会発表のみならず、英文・和文での原著論文も継続して出しており、その業績は高く評価される。アレルギー研究班は、喘息や食物アレルギーの治療に関して複数の大規模臨床研究を全国レベルで行い、それらの結果がいくつかの英文誌に掲載された。重鎮が多く、学会活動も活発であり、業績面では非常に充実している。毎年複数の若手医師が当研究班に所属しており、今後は若手の指導・育成が重要課題と言える。血液腫瘍研究班は高いモチベーションを維

持しつつ、日々の臨床に励みながら研究にも取り組んでいる。若い医師に対する専門教育はしっかり行われている。今年度も昨年と同様に英文・和文での論文発表がなされており、その継続性は高く評価される。ここ 1～2 年でぜひとも若い力の参画が望まれる。感染免疫研究班では先端研究として先天性免疫不全に対する遺伝子治療の研究が行われている。また、PCR 法を用いた病原微生物の同定や慢性肉芽腫症に対するサリドマイドの効果等の検討も行っている。今後は、業績面で原著論文の増加が期待される。循環器研究班は臨床的貢献度が高く、若手医師に対する専門教育も積極的に行われている。右心不全ラットを用いた基礎的研究や先天性心疾患におけるウロコルチンの検討などの臨床研究も進んでおり、本年度は学会発表も数多く行われた。論文発表も少しずつ出てきている。腎臓研究班に関しては若い力が徐々に台頭してきていると言える。学会発表や原著論文も増え、その成果は実を結び始めてきた。さらなる発展が期待される。内分泌研究班は代謝研究班の中の 1 グループとして活動してきたが、このたび 1 研究班として独立することとなった。研究班長以外は若手のみで構成されているため、今は臨床面・研究面において一步一步業績を積み上げていく段階である。

総括すると、本年度は昨年度と同程度の安定した業績であった。しかし、講座としてはさらなる飛躍を目指すためにも、各研究班がより高い Impact Factor の英文雑誌への掲載を増やしていくことを視野に入れ、日々研鑽を積んで行く必要があると思われる。また、教育面でも内容を一層充実させながら質の向上を図り、小児科学講座全体を活性化させていくことが重要である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Ohashi T, Iizuka S, Shimada Y, Higuchi T, Eto Y, Ida H, Kobayashi H. Administration of anti-CD3 antibodies modulates the immune response to an infusion of alpha-glucosidase in mice. *Mol Ther* 2012; 20(10) : 1924-31.
- 2) Nishiyama Y, Shimada Y, Yokoi T, Kobayashi H, Higuchi T, Eto Y, Ohashi T. Akt inactivation induces endoplasmic reticulum stress-independent autophagy in fibroblasts from patients with Pompe disease. *Mol Genet Metab* 2012; 107(3) : 490-5.
- 3) Kobayashi M, Ohashi T, Fukuda T, Yanagisawa T, Inomata T, Nagaoka T, Kitagawa T, Eto Y, Ida H,

- Kusano E. No accumulation of globotriaosylceramide in the heart of a patient with the E66Q mutation in the α -Galactosidase A gene. *Mol Genet Metab* 2012; 107(4) : 711-5.
- 4) Kikuchi K, Hamano S, Mochizuki H, Ichida K, Ida H. Molybdenum cofactor deficiency mimics cerebral palsy: differentiating factors for diagnosis. *Pediatr Neurol* 2012; 47(2) : 147-9.
- 5) 栗原まな, 宍戸 淳, 吉橋 学, 藤田弘之, 小萩沢利孝. 小児外傷後てんかんの検討. てんかん研 2012; 29(3) : 460-9.
- 6) 松浦隆樹, 浜野晋一郎, 菊池健二郎, 山田哲史, 伊藤裕司, 和田靖之, 久保政勝, 鍵本聖一, 井田博幸. サルモネラ腸炎でけいれん・高CK血症を呈した急性脳症の2例. 日小児会誌 2012; 116(4) : 705-9.
- 7) Katsunuma T, Ohya Y, Fujisawa T, Akashi K, Imamura N, Ebisawa M, Daikoku K, Kondo N, Tera-da A, Doi S, Nishimuta T, Noma T, Hamasaki Y, Kurihara K, Masuda K, Yamada T, Yamada M, Yoshihara S, Watanabe K, Watanabe T, Kitabayashi T, Morikawa A, Nishima S; Protective Effect of Tulobuterol Patch on the Long-term Management of Asthma in Young Children Study Group. Effects of tulobuterol patch on the treatment of acute asthma exacerbations in young children. *Allergy Asthma Proc* 2012; 33(3) : e28-34.
- 8) Matsuda A, Morita H, Unno H, Saito H, Matsumoto K, Hirao Y, Munechika K, Abe J. Anti-inflammatory effects of high-dose IgG on TNF- α -activated human coronary artery endothelial cells. *Eur J Immunol* 2012; 42(8) : 2121-31.
- 9) 寺尾陽子, 秋山政晴, 横井健太郎, 山岡正慶, 清水美佳, 加藤陽子, 田中圭一郎, 馬場優治, 桑島成央, 芦塚修一, 吉澤稯治, 本木隆規, 齋藤義弘, 井田博幸. 腹腔内出血を契機に診断された軽症血友病 A の13歳男児例. 臨血 2012; 53(8) : 765-9.
- 10) Murayama S, Akiyama M, Namba H, Wada Y, Ida H, Kunishima S. Familial cases with *MYH9* disorders caused by *MYH9* S96L mutation. *Pediatr Int* 2013; 55(1) : 102-4.
- 11) Ogawa K, Hishitani T, Hoshino K. Absence of the coronary sinus with coronary venous drainage into the main pulmonary artery. *Cardiol Young* 2013; 23(5) : 759-62. Epub 2012 Oct 19.
- 12) Sato Y, Fujiwara M, Kobayashi H, Ida H. Massive accumulation of glycosaminoglycans in the aortic valve of a patient with Hunter syndrome during enzyme replacement therapy. *Pediatr Cardiol* 2013 Feb 13. [Epub ahead of print]
- 13) 金川奈央, 藤原優子, 根本総美, 小林尚明, 斉藤亮太, 斉藤千徳, 井田博幸. 近医処方ステロイドにより診断に難渋した不全型川崎病の1例. 小児臨 2012; 65(5) : 1029-34.
- 14) 平野大志, 藤永周一郎, 遠藤周, 渡邊常樹, 大友義之, 井田博幸. サイトカイン調節異常からみたEBウイルス関連血球貪食症候群の1例. 日小児腎不全会誌 2012; 32 : 85-8.
- 15) 伊藤 亮. *Enterococcus faecalis* 敗血症, 腹膜炎を合併したフィンランド型先天性ネフローゼ症候群の1例. 日小児腎不全会誌 2012; 32 : 299-301.
- 16) Hirano D, Fujinaga S. T Two dosing regimens for steroid therapy in nephrotic syndrome. 2013 Feb 6. [Epub ahead of print].
- 17) Kurosawa K, Masuno M, Kuroki Y. Trends in occurrence of twin births in Japan. *Am J Med Genet A* 2012; 158A(1) : 75-7.
- 18) Kurosawa K, Tanoshima-Takei M, Yamamoto T, Ishikawa H, Masuno M, Tanaka Y, Yamanaka M. Sirenomelia with a de novo balanced translocation 46, X, t (X;16)(p11.23; p12.3). *Cong Anom (Kyoto)* 2012; 52(2) : 106-10.
- 19) 菅野啓一, 谷口博子, 川畑 建, 宮林 寛, 清水正樹. 新生児期に確定診断した, Wiskott-Aldrich Syndrome の超低出生体重児例. 日未熟児新生児会誌 2012; 24(1) : 133-8.

II. 総 説

- 1) 井田博幸. 【クローズアップ ここまで治せるようになった先天代謝異常症】 <疾患別治療法の新展開> ライソゾーム病 蓄積物質の合成を阻害する薬剤 (基質合成抑制療法), 小児内科 2012; 44(10) : 1645-9.
- 2) 井田博幸. 【先天代謝異常症候群 (第2版) (下) - 病因・病態研究, 診断・治療の進歩 -】 ライソゾーム病ゴーシェ病. 日臨 2012; 別冊先天代謝異常症候群 (下) : 465-7.
- 3) Ohashi T. Enzyme replacement therapy for lysosomal storage diseases. *Pediatr Endocrinol Rev* 2012; 10(Suppl1) : 26-34.
- 4) 加藤陽子. 23章: 悪性腫瘍 小児緩和医療・end-of-life care. 遠藤文夫 (熊本大学) 総編集. 小児科診断・治療指針: 最新ガイドライン準拠. 東京: 中山書店, 2012. p.923-6.
- 5) 加藤陽子. 【小児疾患の診断治療基準 (第4版)】 (第2部) 疾患 血液・造血管疾患 溶血性貧血. 小児内科 2012; 44(増刊) : 550-2.
- 6) 河合利尚. 【小児疾患の診断治療基準 (第4版)】 (第2部) 疾患 生体防御・免疫不全 慢性肉芽腫症と他の食細胞機能異常症. 小児内科 2012; 44(増刊) : 242-3.

- 7) 星野健司. 【必携・小児の心エコーガイドー入門から専門まで】動脈管開存. 小児内科 2012 : 75(6) : 987-94.
- 8) 宿谷明紀. 【小児疾患の診断治療基準 (第4版)】(第2部) 疾患 泌尿・生殖器疾患 間質性腎炎. 小児内科 2012 : 44(増刊) : 632-3.
- 9) 宮田市郎. 【小児疾患の診断治療基準 (第4版)】(第2部) 疾患 内分泌疾患 Addison 病. 小児内科 2012 : 44(増刊) : 212-3.
- 10) 和田靖之. 【小児疾患の診断治療基準 (第4版)】(第2部) 疾患 アレルギー性疾患, 自己免疫・リウマチ性疾患 (膠原病) 多形滲出性紅斑 (Stevens-Johnson 症候群を中心に). 小児内科 2012 : 44(増刊) : 298-9.
- ### III. 学会発表
- 1) Kobayashi H, Shimada Y, Iizuka S, Higuchi T, Ari-ga M, Iwamoto T, Fukuda T, Ida H, Eto Y, Ohashi T. Lentiviral vector mediated neonatal gene therapy of Krabbe disease model mice. 2nd Asian Congress for Inherited Metabolic Disease. Seoul, Apr.
- 2) Sato Y, Saito R, Kobayashi H, Fujiwara M, Ohashi T, Ida H, Eto Y : Massive accumulation of glycosaminoglycans in the aortic valve of a patient with Hunter syndrome during enzyme replacement therapy. 4th International Forum for Lysosomal Storage Disorders & 17th Japanese Society of Lysosomal Storage Disorders. Tokyo, Oct.
- 3) Kurosawa K, Enomoto K, Kondoh T, Mizuno S, Adachi M, Muroya K, Yamanouchi Y, Nishikawa T, Furuya N, Tominaga M, Kuroda Y, Naruto T, Ida K, Sengstag T, Manabe R, Masuno M. Trio-exome sequencing identifies mutations of the gene encoding the histone acetyltransferase KAT6B/MYST4 in individuals with the Young-Simpson syndrome. 62nd Annual Meeting of the American Society of Human Genetics. San Francisco, Nov.
- 4) Higurashi N, Hirose S. Challenges in the Establishment of a Dravet Syndrome model using patient-derived iPSCs. Korea Epilepsy Congress 2012 (KEC 2012). Incheon, June.
- 5) Higurashi N. Dravet syndrome or EFMR, what is the difference? - Can you tell the difference? 12th International Child Neurology Congress & 11th Asian & Oceanian Congress of Child Neurology. Brisbane, May.
- 6) Higurashi N, Hirose S. Clinical presentations in early phase of PCDH19-related epilepsy. 9th Asian & Oceanian Epilepsy Congress. Manila, Mar.
- 7) 横川裕一, 滝 智彦, 秋山政晴, 小林 寛, 名越久朗, 知念良顕, 井田博幸, 谷脇雅史. 急性リンパ性白血病に対する維持療法中に発症したランゲルハンス細胞組織球症における同一クローンの解析. 第71回日本癌学会学術総会. 札幌, 9月.
- 8) Akiyama M, Yamaoka M, Terao Y, Yokoi K, Yuza Y, Yanagisawa T, Ida H, Kaneko A, Suzuki S. Reduced cycles of systemic chemotherapy followed by more focused local treatments for intraocular retinoblastoma. 44th Congress of the International Society of Pediatric Oncology (SIOP). London, Oct.
- 9) 加藤陽子, 須田奈美, 秋山政晴, 林 洋輔, 高木明子, 角田真由美, 伊藤達彦, 金子 隆, 川久保孝, 井田博幸, 井上大輔. 当院緩和ケアチームによる小児がん患児に対する症状管理のための使用薬剤の目安の作成. 第54回日本小児血液・がん学会学術集会. 横浜, 11月.
- 10) 河合利尚, 中澤裕美子, 澤新一郎, 伊藤玲子, 新井勝大, 小穴慎二, 安井耕三, 大石 勉, 小野寺雅史. 慢性肉芽腫症腸炎に対するサリドマイド治療の効果と安全性. 第115回日本小児科学会学術集会. 福岡, 4月.
- 11) 和田靖之, 保科定頼, 日馬由貴, 南波広行, 久保政勝, 吉田 博, 富永健司, 杉田哲佳. 病原遺伝子同時検出を用いた冬季の小児呼吸器感染症の起因病原体検索の試み(第二報) : 2011年12月~2012年3月の検討. 第61回日本感染症学会東日本地方学術集会. 東京, 10月.
- 12) 田村英一郎, 河合利尚, 中澤裕美子, 原山静子, 清水泰岳, 伊藤玲子, 井田博幸. 慢性肉芽腫症腸炎における腸内細菌スクリーニング検査. 第44回日本小児感染症学会総会・学術集会. 北九州, 11月.
- 13) Urashima T, Itohisa M, Iijima M, Ito R, Kawachi S, Fujiwara M, Oishi, K, Ogawa K, Ida : H. Bisoprolol improves RV function and hypertrophy via anti-fibrotic effects in PA banded rat. American Heart Association Scientific Session 2012. Los Angeles, Nov.
- 14) Kawachi S, Urashima T, Ida H. Effects of Carperitide administration in rats with monocrotaline induced pulmonary hypertension. 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Seoul, May.
- 15) Iijima M, Kobayashi H, Fujiwara M, Ida H. Detailed cardiopulmonary assessment for preoperative management of Hunter syndrome. 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Seoul, May.
- 16) 山田哲史, 山岡正慶, 宿谷明紀, 小林尚明, 片山 章, 吉澤穰治, 井田博幸. 巨大膀胱結石で発症したrBATのヘテロ変異を伴うシスチン尿症の2歳男児例. 第115回日本小児科学会. 福岡, 4月.
- 17) 伊藤 亮, 井上由香, 渡邊常樹, 藤永周一郎, 清水俊明, 宿谷明紀, 井田博幸. 膜性増殖性糸球体腎炎1

型および3型の7症例の検討. 第115回日本小児科学会. 福岡, 4月.

- 18) 平野大志, 藤永周一郎, 遠藤 周, 渡邊常樹, 伊藤亮, 井上由香, 康 勝好, 井田博幸. サイトカイン制御としてのEBウイルス関連血球貪食症候群に対する血漿交換療法. 第115回日本小児科学会学術集会. 福岡, 4月.
- 19) Motoki T, Itohisa M, Wake E, Urashima T, Miyata I, Yoshimura M, Tojo K, Ida H. Regulation of gene expression of CRH-related peptides and their receptor and crosstalk with inflammatory cytokines in the rat brain caused by experimental heart strain. ENDO 2012: the Endocrine Society's 94th Annual Meeting. Houston, June.
- 20) 小野英利奈, 有賀賢典, 宮田市郎, 望月 弘, 難波範行, 大藪恵一, 井田博幸. SLC16A2 遺伝子に新規変異を認めたAllan-Herndon-Dudley 症候群の1例. 第46回日本小児内分科学会学術集会. 大阪, 9月.

IV. 著 書

- 1) 井田博幸. 6. 先天代謝異常 糖原病2・5・7型. 大関武彦(浜松医科大学), 古川 漸(山口大学), 横田俊一郎(横田小児科医院), 水口 雅(東京大学) 総編集. 今日の小児治療指針. 第15版. 東京: 医学書院, 2012. p.198-9.
- 2) 菊池健二郎, 浜野晋一郎¹⁾. Part 2: 身近なけいれん・てんかんの治療戦略 1章: 急性期のけいれん, 発作疑いの対応・重積の治療. 奥村彰久(順天堂大学), 浜野晋一郎¹⁾(埼玉県立小児医療センター) 編. 子どものけいれん・てんかん: 見つけ方・見分け方から治療戦略へ. 東京: 中山書店, 2013. p.136-43.
- 3) 藤原優子. I. 症例提示 1. 古典型ファブリー病の3例. 衛藤義勝責任編集, 井田博幸, 遠藤文夫(熊本大学), 大橋十也, 奥山虎之(国立成育医療センター), 櫻庭 均(明治薬科大学), 辻 省次(東京大学), 鄭忠和(鹿児島大学), 成田一衛(新潟大学), 湯澤由紀夫(藤田保健衛生大学) 編. ファブリー病 UpDate. 東京: 診断と治療社, 2013. p.268-80.
- 4) 宮田市郎. C. 臨床症状 10. 内分泌異常. 衛藤義勝責任編集, 井田博幸, 遠藤文夫(熊本大学), 大橋十也, 奥山虎之(国立成育医療センター), 櫻庭 均(明治薬科大学), 辻 省次(東京大学), 鄭 忠和(鹿児島大学), 成田一衛(新潟大学), 湯澤由紀夫(藤田保健衛生大学) 編. ファブリー病 UpDate. 東京: 診断と治療社, 2013. p.96-7.

皮膚科学講座

- 教授: 中川 秀己 アトピー性皮膚炎, 乾癬, 色素異常症
- 教授: 上出 良一 光線過敏症, アトピー性皮膚炎, 皮膚悪性腫瘍
(定員外)
- 教授: 本田まりこ 皮膚ウイルス感染症(ヘルペスウイルス, ヒト乳頭腫ウイルス), 性感染症
(定員外)
- 准教授: 石地 尚興 皮膚リンパ腫, ヒト乳頭腫ウイルス感染症, 皮膚アレルギー学
- 准教授: 太田 有史 神経線維腫症
- 准教授: 佐伯 秀久 アトピー性皮膚炎, 乾癬
- 准教授: 川瀬 正昭 ヒト乳頭腫ウイルス感染症
- 講師: 伊藤 寿啓 乾癬, 光線療法
- 講師: 梅澤 慶紀 乾癬
- 講師: 松尾 光馬 ヘルペスウイルス感染症
- 講師: 延山 嘉真 皮膚悪性腫瘍

教育・研究概要

I. 乾 癬

乾癬において, ステロイド外用剤と活性型ビタミンD₃製剤を用いた外用療法は治療の基本となる。内服療法としてシクロスポリンMEPC, エトレチネートがあり, さらにスキンケア外来では全身照射型のNarrow-band UVB, 308nm excimer lampを設置し, 現在, 積極的に光線療法を行っている。また, 治療の選択肢は増えてきており, 2010年1月から生物学的製剤である完全ヒト型およびキメラ型のTNF- α 抗体のアダリムマブ, インフリキシマブが認可され, 難治性乾癬患者への使用が開始された。また, 2011年3月には新たな生物製剤である完全ヒト型IL-12/23 p40抗体のウスティキマブが認可され, 難治性乾癬患者の治療の選択肢がさらに増えた。治療法の選択には疾患の重症度に加え, 患者のQOLの障害度, 治療満足度を考慮することが重要である。そのために我々が作成した乾癬特異的QOLの評価尺度であるPsoriasis Disability Indexの日本語版を応用し, 患者QOLの向上に役立てている。また, 乾癬患者に多いとされるメタボリック症候群に対しても精査を行い, 高血圧, 高脂血症の治療も合わせて行っている。さらに乾癬の重症度と労働生産性に関する疫学調査も行っている。また, 効果の高いと考えられる生物学的製剤である抗IL-17抗体, IL-17受容体抗体, や抗IL-23 p19抗体,